

忍び寄る冬の足音を知らせ、身が引き締まり凜とした大気とともにあることを思い出させてくれる言葉に立冬がある。24節気の中で、最もポピュラーな中国伝来で我が国に根付いている暦の1つといえよう。

今年は、11月7日にあたり、「冬の気立ち始める」日である。

気象現象から見ると、この日（11月7日）は東京と大阪で木枯らし1号が吹く特異日で、未だ寒さに順応しきれていない身体に活を入れてくれる気がする。

木枯らしが吹いても、そのまま寒さが続くことは少ない。

夏の暑い太平洋高気圧と冬の大陸育ちの寒い高気圧が、およそ日本付近の3000メートル上空で主役交代の挨拶をしているようなものだ。冬の主役の寒気団が中国大陸やシベリア付近で発生し、勢力を強め冬将軍が日本に訪れるまでは、少し時間を要す。それまでは寒冷前線に伴う、深い気圧の谷の通過で、気温が急降下し冷たい風が北海道や高い山では雪をもたらすが、直ぐに回復する。

寒さは一時的であるが、うっかりすると、体感気温の急変化で風邪をひきやすい。体調の維持に努めることが大切な季節だ。

小春日和（こはるびより）という、のどかな田舎の縁側と日向ぼっこをしているおばあさんを想起する名前がついているが、れっきとした11月の天気を言い得て妙だ。

都会の高層住宅に住む身には、とんと縁がない我が国伝統の家屋のゆとりの象徴、縁側が懐かしい。現代の建築家の創意と工夫で、マンションタイプの縁側を描けないだろうか。確実に訪れる少子高齢化社会に備えたい間取りだ。

ベランダのホタルでなく、縁側から遠景を眺めながら、珠に訪ねてくる孫達と一緒に、日向ぼっこの元気なお年よりであって欲しい。

最近、住宅関連の企業や産業に大きな変化がある。これまでの画一的な高層住宅建設を見直し、人間らしく過ごせる空間の設計に努力して欲しい。

郊外から、都心回帰の傾向もあるという追い風も吹き出した。景気と関係なく、一国一城の主には歓迎されるだろう。新たな都会のゆとりと文化の継承につながるだろう。